✝

2022年

11月 第1・2週の主日礼拝説教要約

・11月　6日：ルカ福音書　14：12－15．
（1－24）

『　神の国の宴　』

・11月13日：ルカ福音書　15：11―20．

『　帰　還　』

衣笠病院教会　牧師　宮原晃一郎

《　神の国の宴　》

ある安息日のこと、イエスはなぜかファリサイ派の議員（指導者？）の家に招かれています。この主人の他にもファリサイ派の人々や律法学者たち、その他の人々も少なからずいたようです。社会的な地位の均衡が重んじられる古代のユダヤ人の会食の場に、いかなる理由でイエスが招かれたのかはともかく、イエスの前には水腫を患っている人もいます。

さて、どんなタイミングで皆が御馳走にありついたのかは不明のままですが、イエスがその場で、こともあろうに「宴」の譬え話を始めます。話はワインや食事のメニューのことではなく、なぜか席順や招待客の変更に関することでした。話の途中で、その話が「神の国の宴」であることに気付いた客が、そのことを指摘すると、イエスはまさにその「国」の宴の現状を説明します。招待した家の主人への返礼が困難な人々が宴に臨席することになると。具体的には貧窮に陥っている人々や、障害等により、当時の社会参加が困難な人々こそ招き入れられるのだと。

ただ、その理由が面白く、最初に招待されていた別の人たちがこぞって辞退したことから欠員補充の必要が生じてそうなったのだと。人間の欲望の大きさとは不均衡な神の国の宴とは、人から顧みられることなく一蹴される宴だったのです。同じルカ福音書の５章の３１節以下にある言葉を思い出します。

> 医者を必要とするのは、健康な人ではなく病人である。私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。

病人と罪人は、イエスの言葉ではよく一括りにして語られます。どちらも神が放ってはおけず、手を差し伸べるものとして。さらに、どちらも自覚が必要であるにもかかわらず、発覚しないこともあれば、発見が遅れることもあるものとして。

その日、ファリサイ人の家になぜか水腫の病人が招かれていたことは、神の国の宴の譬え話とも僅かな一致点がありました。イエスがいたことにより、そこにもささやかなる神の国が出現しており、水腫の病人はそこで癒されていたのです。ユダヤの安息日のことでした。

≪．帰　還　≫

ある日、イエスが取税人や罪人らを受け入れて、一緒に食事をしていたところに、どこからともなくパリサイ人や律法学者が立ち入り、文句をつけます。彼らは、イエスが社会的に問題のある（？）人々と同席していることが、なぜか気に入らないようです。余計なお世話です。ただ、会食のみならず、イエスがもし、そこで何かを語りだすと、なぜかその集会は規制の対象にされたようです。

するとイエスは、立ち入ってきた“監視団”の方に向きを変えて、彼らに譬え話をして聞かせます。失われた一匹の羊の譬え、失われた一枚の銀貨の譬え、それぞれ短い譬え話の次に非常に長い放蕩息子のたとえ話を始めました。

この話は、息子の父親から見ると死んだも同然の失踪した次男が遠い国から帰還する話です。羊を見失った羊飼い、銀貨を落として紛失した貧しい女性、失踪した息子の父親、いずれもことの重大さに茫然自失している人たちです。努力をしたところで、失われたものが見つかるという保証もありません。羊や銀貨には元に帰るという意思はありません。ただ、失踪した息子（次男）に、もし、その意思があるならば父親の許に帰還することが可能です。イエスの譬え話は、その息子の心変わりに着目します。

この息子は父親の存命中にもかかわらず、財産の分与を要求しました。手に入るとそのまま失踪してしまいます。生家から遠く離れた所に移住して自堕落な生活をはじめたのです。

月日が経ち、身を持ち崩し、困窮に陥るとさらに、その地方で飢饉が発生します。今度は生きるためにはなりふり構わず奴隷のようになって働くしかありません。何でもよいから住み込みで働こうと、現地の一人の地主に頼み込んで豚飼の仕事を得ます。豚の飼育は、聖書の民とは無縁の仕事です。そこが生活習慣や価値観が全く異なる世界であることを意味します。けれども生きるためには、そうするしかありません。ついでに豚の餌にもありつこうとしますが、豚はそれを許してくれません。

親許から失踪してこれまで我儘し放題に生きてきたこの息子は、やっと自分の愚かさに気が付きました。そして、親許に帰ることを決意します。といっても財産分与を受けた身です。親はすでに他界していてもおかしくありません。帰還は一刻を争います。息子は父親が存命していることに賭

けるしかありません。裸一貫、一念発起して重い腰を上げ、この放蕩息子は異国を後にしました。

彼は道々、父親の存命を祈りつつ、再会を果たした時の懇切丁寧な謝罪の言葉を考えます。「自分は失踪して大きな罪を犯し、分与された財産を使い果たし、もう父の息子の資格は失いました。もし、それでも私を雇ってくださるのなら、一人の使用人としてください」とでも言うしかありません。

一文無しの息子は、長い道のりを、生死をさ迷いつつ、やっとのことで生家の近くまでたどり着くと、何と、父親の方から、この変わり果てた放蕩息子を発見して近寄り、彼を抱きしめたのでした。

しかし、もう息子の信念は変わりません。彼は道々考えた、そのままの謝罪を実の父親にむかってします。今後は自分を使用人として受け入れてくれと。心底彼は深く恥じ入り、もう親の愛を受ける資格のないことを表明しました。

けれども、父親は自分ではなく、何の音沙汰もない息子の方が、すでに死んでいるのだと諦めていたところに、その息子が生きて帰ってきたことが嬉しくてしかたがありません。また、心底悔い改めた彼の態度をみれば、もうそれで充分でした。

けれども放蕩息子の兄は、父親の、弟に対する寛容の一部始終が許せません。自分は決して父親に逆らうことなく質素に真面目に生きてきたからです。なのに、家族をおいて失踪し無一文となり、帰って来て親に泣きついた弟の生還を、盛大な宴をもって祝うなど、真っ平御免です。「財産を食いつぶしたあなたの息子」を、何のお咎めもなく歓迎するとは何事かと、兄はもう彼を弟として扱うことさえしません。兄弟間での許容範囲をはるかに超えていたからです。赦せるのは父親だけでした。

この譬え話の兄弟とは人間同士、父親は神です。もし、兄が弟を、弟が兄を赦せないなら兄弟喧嘩が発生します。これが戦争です。パリサイ人や律法学者が罪人らを赦せないのと同じです。けれども、父なる神の目から見ると、どちらも同じ罪人でしかないのです。イエスは事あるごとに、こうしたメッセージを発しました。しかし、パリサイ人や律法学者が悔い改めるケースは殆どなく、逆に、多くの罪人らはイエスの前で悔い改めていたのです。